
とある学園都市で学園黙示録

晃甫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園都市で学園黙示録

【Zコード】

N6229Q

【作者名】

晃甫

【あらすじ】

柄にもなく子供を救おうとして死んでしまった主人公、

九十九 桜華
つくもあいか

しかし彼の魂はまだ死んでおらず突然現れた神様に転生を勧められ“とある魔術の禁書目録”と“学園黙示録”的交わるはずのない二つの物語が交差する世界に転生することに！？

この小説はとある魔術の禁書目録、学園默示録のクロス作品でチートのオーナーを中心につづっていくものです。

11月1日

何ヶ月も更新を停滞してしまい申し訳ありません。

今月中には連載を再開させます。

現在一話から修正中ですのでそちらもご覧ください。

現在四話まで修正。

プロローグ（前書き）

なんだかアイデアが出てきたため書いてしまいました。

以前から私の小説を読んでくれている方はこんにちわ。

そうではない方は初めてまして。

基本この小説は気が向けば更新、といつ形になると思いますが更新はしていくつもりですのよろしくお願いします。

プロローグ

ある日、俺は死んだ。

柄にもなく車に轢かれそうになつていた小さな男の子を助けようとして。

生涯二二年、全くつまらない人生だった。

高校を中退した俺は好戦的な性格も相まってか、いつのまにか暴力団に所属しその内で幹部にまで登り詰めるほどになつていた。

毎日毎日殴り合ったり、殺し合ったり。組同士の諍いなんて日常茶飯事だった。

だけどそんな毎日は俺にとって退屈以外の何物でもなかつた。

なんで男の子を助けようとしたかを問われればこう答えるしかない。

平凡で代わり映えしない日常に飽き飽きしていた俺は何か変わるキッカケが欲しかったかも知れない。

もしかしたら別の生き方もあったかも知れない。

そう思つたらいつのまにか勝手に身体が動いていて、気づいたら

ア フィードに跳ねられて血の海だった。

(ああ……、俺死ぬんだな……。せめて次生まれ変わるとときは、退屈しない人生が送れますように……)

目の前に広がる血の海と助けた小さな男の子、そしてそれを取り囲む野次馬たちを最期に、俺の視界は真っ暗になった。

「……………ん?」

何かがおかしい。

俺は死んだ、確かにその実感はある。

あの出血量では完璧に失血死だらうし何よりも跳ねられた感覚が今なお身体に生きしく残っている。

それなのに、俺は無傷で何もないだだつ広い空間に一人で立っている。

「……………どうなってんだ?」

理解が追いつかない。元々考える脳みそなど大して持ち合わせていないが。ここがどこなのか、死んだはずの自分が何故無傷で立つ

ているのか。

「やあ、青年」

そんな事を考へていると、不意に背後から声をかけられた。

振り返つてみればそこには真っ白な服をきた見た目中学生ほどの少女。目を引く点を言えば蒼い瞳に綿のようにサラサラな金の髪の毛だろう。

「誰だお前？」

暴力団に所属していた故の性というのか、知らない人間に会つたらとりあえずメンチを切つてしまつ。

「少女に向かつてメンチを切るな。そつだなあ、まあ君らが言いつとここの神様つてどこかな？」

神様？ こちつこいのが？「冗談はよしてくれ。

「何失礼なこと考へてんだお前は」

「！？ 人の心が読めるのか！？」

「だから神様だつづてるでしちゃうが」

なんだか機嫌が悪くなつてきた神様を鎮めるためにとりあえず話を進める。

「で？ その神様が死んじまつた俺に何の用だよ」

「君はまだ死んでないよ」

「は？」

突然のことに無意識のうちに呆けた声が出てしまった。

「まあ肉体は死んじゃってるんだけどね、魂だけはまだ生きてるんだよ。どういうわけか」

「じゃあ何か？俺は生き返れるってことか？」

「まあ肉体を変えればね。ホント何で魂が消えてないのか不思議でしょ？がないよ」

いやそんな」と言われても俺が知るわけないだろうが。
突然すぎて話についていけない。そもそもここには本当に神様なのだらうか。

「あ、ちなみにここは現世と靈界の中間点、言つてみれば三途の川の田の前つてところかな」

なんとなく理解できたような気がした俺は話を切り出す。

「せっかく生き返れるって話だが、遠慮しつぐ。俺はあんな退屈な世界で人生を過ごすつもりはねえよ」

あんな退屈で平凡な毎日、わざわざ生き返つてまで戻りつとは思えなかつたのだ。

それを聞いた（自称）神様は、

「なら転生してみる?」

「転生?」

「ん。今までの世界がイヤだったからなら特別に違う世界に転生させてあげる?」

思つてもみなかつた展開。俺としては退屈しない世界であるのなら万々歳なのだが。

「そんなことできるのかよ?」

「私を誰だと思つてんのよ、神様よ? そんなの赤子の手を惹るよりも簡単よ」

得意氣に言い放つ（自称）神様。どうやら本当に転生させられるらしく。

「退屈しない世界に行けるんなら、転生をしてくれ

「はこはこ。こつちは最初つかのつもつよ。何か希望とかある

ー?」

「退屈しないこと」

「わうねー、なら『』ある『』の世界とかは?」

とある魔術の禁書目録

。

俺は現世ではその名を知っていた。一時期暴力団でライトノベルが何故か流行った時期があり彼もその流行に乗って全巻読破したからだ。因みにレールガンも読破済み。

「とあるか……、いいな、退屈しないですみそудаし」

「じゃあ決まりね、能力の希望は？」

能力かあ。無能力者つてのは流石に嫌だな。

「退屈しない程度の能力をくれ」

「じゃあこっちで適当に決めるね」

そこでふと彼は気づいた。

彼は全巻読破したためあらすじを全て分かつてしまっている。先が見えている人生などおもしろくもなんともない。

「なあやつぱり

」

「ん~？ そんなことわかつてるつて、私がそんなこと考えてないとでも思つたわけ~？」

思つたよりも神様（自称）は切れ者だった。

「君の場合特別にもう一つ世界を混同させるよ、学園默示録の世界をね」

「学園默示録？」

彼は「」の物語はさわり程度しか知らない。

「あのジンジが「」が出て来るやつか？」

「そうそれ、おもしろいわ？」

確かにこれならば自分が先の展開を知らないので退屈はしないだろう。

何より二つの世界が交わるところのが興味深い。

「ならそれで頼む」

「OK、基本的にあるをベースにして途中から默示録が干渉するような感じになるか？」

「わかった」

「あ、最後に「」。名前はどうある？ 変えようと思えば変えられるよ？」

「……いや、名前はこのままでいいわ。せっかく親から貰った名前なんだからな」

「そうだね、私もそのほうがいいと思うよ。よしと」

神様が軽く手を振ると同時に、俺の後ろに真っ白な扉が現れた。

「それをくぐれば新しい人生が待ってるよ」

俺は扉を真っ直ぐに見つめる。

息を整え、ゆっくりと扉に手をかける。
ギィツ

と音をたて開かれる扉、先は眩しくて何も見えない。

「ありがとな、行つてくるわ」

最後に振り返つて神様に礼を言い、扉の向こうへと姿を消した。

「行つてらつしゃい、九十九 桜華。^{つくも}_{あうが}。今度こそ、退屈しない人生を」

そう言い残し、神様はその場から姿を消した。

九十九 桜華
享年22
身長177cm
体重66kg

彼の退屈しない一度目の人生が始まる。

第一話 学園都市へ（前書き）

遅れました（ - ” - ; ）

主人公の能力を考えていた為なのですが皆さまのお気に召すかが心配です。

ではどうぞ。

第一話 学園都市へ

「……ん」

ひんやりとした床の感触、まるで異次元にでもやってきたかのような妙な感覚。

そんな空間の中、俺、九十九桜華は田を覚ました。

「……、どーだ?」

なんだかひどく頭が重い。異世界にきた副作用だろうか。

俺が今居る空間は窓もドアもない空間。

そして田の前にあるのは円筒の巨大な水槽。

原作を知っていた俺はこの場所がどこなのかを知っていた。

学園都市統括理事長の本拠地、窓の無いビル。

「やつと気がついたか」

そして水槽の中から放たれる言葉。

逆さで漂うその人物はまさに『とある』の世界のそれだった。

「アレイスター……！」

「ほお、私を知っているのか。成程な」

俺の一言に納得したといった表情で返すアレイスター。実際生で見てみるとマジで氣味悪いな。

「何で俺はこんなとこにいるんだ？」

「それは君が一番よくわかつているのではないか？」

「……お前、一体どこまで知ってるんだ？」

「さあな。だが少なくとも君について知らぬことはないと黙りておこう」

特に表情も変えず淡々と語るアレイスター。「いつ俺が転生者だつてここまで知つてやがるのか？」

「それよりも私が興味があるのは君の能力だよ。九十九桜華」

能力？

ああ、何か神様が退屈しない程度の能力をくれてたんだっけか。

「退屈しない？ そんな程度で済む能力ではないぞ」

「こいつ人の心まで読めるのかよ……。

「どんな能力なんだ？」

「ふむ……、能力名だけを言つてしまえば『リダクションオーバー超越還元』と言つたところだ」

「リダクションオーバー」
「超越還元？」

なんだそれ？

原作じゃ聞いたこともないな。

「還元とはどういう意味か知っているか？」

「元に戻すとかそんなんだろ」

「おお知っていたか」

馬鹿にしそうだこの逆さまロン毛野郎。

「まあ簡単に言うとだな、君の能力は相手のAIM拡散力場に干渉することでその能力を使用前の状態、つまり何も無い状態に還元することができるのだよ」

「それただの還元じやん」

超越の意味がわからないじゃんね。

「まあ早まるな。君の能力の恐ろしいところはこれからだ。君の場合、還元した能力を自らのAIM拡散力場と混合し取り込むことでその能力を使用者以上の力で再利用することができますのだよ」

「…………?????」

「君はバカなのか。バカはバカなりにバカの頭をフルに使用して考えろ」

「おいバカバカ言いすぎたぞバカ野郎」

「バカの君にもう少しわかりやすく説明してやるわ」

表情は変わらないがなんだか呆れているように見えなくもない表情をこちらに向けるアレイスター。

完全にバカにしていやがるな。

「つまりだ。君が還元した能力に君自身の演算能力が上乗せされて使えると」「う」とだ

「まさか。それってほぼチートじゃねえか」

「ただし使い勝手が言いとはいわん」

「どうしてだ?」

「相手の能力を還元するには直接相手のAIM拡散力場に干渉しなくてはならん。つまりまず相手に能力を使わせなくては話にならんのだ」

「つてことはあれか? 相手が先に能力使わねえと俺無能力者みたいなもんか!?」

「そうこうことになるな」

「めんどくせー!! 神様ちょーめんどくせーよこの能力!!」

思わず天井に向かつて叫んでしまった。確かに退屈しない程度の能力とか言つたけどこんなめんどくせーもの用意しなくてもいいじ

やねえかよー！

「もちろんアーメリットばかりではない」

「まだなんかあんのか？」

「一度記録したA.I.M拡散力場はそのまま残り続けるからな。君は還元した数だけ能力を使えるぞ」

「おお……」

「ただし」

持ち上げておいて一気に叩き落とすつもりですかこの野郎。

「記録する場所はあくまで君の脳内だからな。君の頭ではせいぜい三つが限界だろ？ それ以降は還元した順番に調整されていくぞ」

「つまり？」

「……もう説明が面倒になつてきたんだか。つまり、君は還元はいくらでも行えるしその場で超越還元することができるが通常時に使用できる能力は還元された最新の三つだけだとこいつことだ」

「……まあ鬭う分には問題ないだろ。それに三つもストックがあるなら充分だ。多重能力者みたいなもんだしな」

「ふむ。言つてしまえばそうなるな」

「やう言えば俺これからどうなるんだ？」

「……君は自分の身体をまず確かめてみる」

完全に呆れているの溜め息が聞こえてきそうな表情でアレイスターが言つ。

そう言えば何だか微妙に目線が低い気がする。

「今の君は十四歳の中学生だ」

「またすげえ若返ったな」

精神的には二二歳なのでなんだか微妙に身体とズレがある気がする。

「ひからで転校手続きはすでに済ませてある。部屋も用意してあるからそこを使つとい」

「わかつた。ちなみにだが俺のレベルって……」

「言つまでもないが君の能力は間違いなくレベル5だ」

「まじでか！？」

なんだかんだでテンションがあがる。
やっぱり男として超能力者には憧れがあるからな。

「だが君の存在はイレギュラーだからな、レベル5だが序列に組み込むわけにはいかん」

「ええ～？」

「どうせならドバーンと新たな学園都市のレベル5として堂々と街を歩きたかったんだが。

「そうだな、ではこいつじょう。君は幻のレベル5、『アワトナンバ序列欠如』だ」

「おおーーー 何かカッコイイなそれーーー！」

「ただし日常生活において一般人にこのことは極力知らせるな

「わかつてるよ。俺だってこの世界を壊したくはないからな

「ううだ。自分といつもレギュラーの存在がいるだけで世界は大きく歪んでる。

それをさらに歪めるような情報をみます話すわけにはいかない。

「わかつていればいい

「おう。なら俺はもう行くぜ」

「ああ。何があるときは電話したまえ。回線を繋げてやるつ

「はいはい」

「そう言つて俺は踵を返して後ろにいた空間移動能力者の元へと向かう。

そこで、最も聞かなくてはならないことに気が付いた。

「なあアレイスター」

振り返りアレイスターに問いかける。

「今日は何月何日だ?」

これが最も重要な。

原作を知っている以上イベントに関わるには口にちを把握していくことはならない。そのためにこの世界に来たのだから。

「七月十日だ」

成程、原作開始の少し前か。後はどこで黙示録が介入してくるかだよな。

「わかつた。サンキュー」

それだけ言い残し、俺はテレポーターとともに窓のないビルを後にした。

「フ、九十九桜華か。面白い存在だ……」

第一話 学園都市へ（後書き）

次回は原作キャラと遭遇します。

第一話 7月10日（前書き）

一話を投稿してから気が付いたんでしが学園黙示録が始まるのって春ですね…

ということです現在7月の学園都市とクロスするのは来年4月になります。

…また長いなー…

第一話 7月10日

学園都市統括理事長の本拠地、『窓のないビル』から案内人とともにテレポートで移動し、路地裏へとやつて来た俺と案内人の少女。

「ここは……、第七学区あたりか?」

辺りを見回して場所を確認してみる。なんだか学生の賑やかな声が向こうから聞こえるな。

それを隣で見ていた案内人がふと話しかけてきた。

「アナタ、何者?」

そちらを向いてみるとものすごい怪訝な顔をしている少女。俺は案内人である彼女のことと原作知識で知っていた。

結標淡希。

「何者?」と聞かれて素直に転生者ですと一いつ返事で言えるわけもないのに、俺は適当に話をばぐらかすることにする。

「う~ん、しがない学生つてことだな」

「ふざけないで。アレイスターと直接話せる人間がただの学生なわけないじゃない」

彼女は俺とアレイスターが何を話していたのかは知らない。しかしこの学園都市でアレイスターの存在を知っている者など稀有なた

め、結標の疑惑も当然と言えば当然である。

「本当に何にもないしがない学生だつて」

「なら何故アレイスターのことを知つてゐるのよ」

「まあ成り行きだな」

「成り行き？」

「まあそんな話なんかどーでもいーじゃねえか」

正直、今俺九十九桜華はものすゞく感動していた。

小説の中でしか知らなかつた人物が今こうして目の前にいて、自分と会話をしているのだから。

冷静を装つて会話をしているものの内心はとんでもなく興奮していたのだ。

それがうつかり口を滑らしてしまつ原因となつたりもするわけで。

「……まあいいわ。どうせアナタとはこれからも会つたりになりそうだし」

「おう。じゃあな、結標」

「……何で私の名前を知つているの」

(あ……、やべ)

「あ、アレイスターから聞いたからな」

咄嗟に出した答えとしては中々にナイスアドリブだ俺。

「ふうん……。まあいいわ、それじゃ」

そう言つて結標はテレポートを使わずに何処かへ歩いていつてしまつた。まだあのトラウマは克服してないみたいだな。

「……ふう、あつぶねー。いきなりバレるとこだつたじゃねえか

胸を撫で下ろした俺はとりあえず路地裏から出て大きな通りへ出るべく歩き出す。

と、流石は路地裏とでも言つべきか。

何人かの体格のいい男が制服を着た女の子をナンパ、もとい脅迫している現場にバッタリ遭遇した。

いきなりかよ、神様。

俺こっちの世界でも殴る蹴るの仕事に好かれてんのかな。

ヤクザとは義理堅い生き物だ。

目の前で何の理由もなく襲われたりしている人間がいれば真っ先に助ける。

それ故、前世ではその実力と人望も相まって二十二歳にして大御所の幹部にまで登り詰めたのである。

まあ今は十四歳の身体になつてはいるが、その性格は何も変わつていない。

しうがねえな、と軽く息を吐いて、高校生だか大学生だかのチ

ンピラたちに声をかける。

「おこ。その子困つてんじやねえか、離してやれよ」

その言葉にチャンピラたちは少女から後ろに立つていていた少年へと振り返る。

「ああ？ 何だこのガキ。とつとと消えな。」

「こにはてめえみたいなガキが来ていい場所じやねえよ……」

「オラ！… 痛い目見ねえうちに消えなーーー！」

それぞれ言いたい放題のチャンピラたち。

もう一度言うが、俺、九十九桜華は元ヤクザである。

気はとってもとっても短く、この手の挑発にはとっても乗りやすい。

事実、俺は今非常にイライラしていた。

爆発寸前だ。

「…もう一度だけチャンスをやる。その子を置いてさわると消えろ

クソ野郎……」

ミシミシと音をたてながら拳を握り締め、必死に堪える。

だが、チャンピラたちはそんなことを知る由もなく。

「ああ！？ 生意気つけじやねえかガキが！… 殺されても文句言うんじやねえぞ！…」

「殺されても、だあ……？」

今の桜華の発言に頭にきたのかチンピラの一人が身体から紫電を走らせ電撃の槍をこちらに投げてきた。いやそんなことはどうでもいいんだよ。こいつ、今なんて言いやがった？

「人を殺したこともねえようなチキン野郎が、簡単に殺すとかぬかしてんじゃねえぞクソ野郎がアアああああ……」

叫んだのと同時、俺の身体に電撃の槍が直撃した。

「ヒヤハハ！！ バカが、俺はレベル3の電撃使い（エレクトロマスター）だ！！ てめえなんかが敵う相手じゃねえんだよ……」

勝利を確信したのか意気揚々と言ひ放つチンピラ。

「…………」

だが、俺はさつきと変わりず悠然とそこに立っていた。

「なっ！？ 何で無傷なんだよ……」

倒れるどころか傷一つない俺を見てチンピラは驚きとともに恐怖を覚えたようで、心無しか声が震えている。

「つづーかよお……」

そんなチンピラに対し、ミシミシと拳を握り潰すべりこむ強く握り締め、言つた。

「俺じやなかつたら死んでたかもしれないぞ」「あああああああ

「……」

思いきり振りかぶった拳はそのまま真っ直ぐに電撃使いのチンピラの顔面へと吸い込まれていく。

ゴツー！

「ぶへらつー！」

顔面を殴られたチンピラはそのまま路地裏の壁に激突し、意識を失つたのか動かなくなつた。

「なつ、てめえ能力者か！？」

残つていた二人のチンピラがその場から数歩後退り立つ。

「バカが、これはただの腕力だクソ野郎があああ……」

もう一発。

前にいたチンピラの腹部に思いきり拳をぶち込む。

「ヒツ……」

残るのはあと一人。

悲鳴を洩らすこのチンピラだけだ。

「さあ、遺言はあるか？」

「て、てめえ何者だよ……」

「ヤクザだよ

放たれた拳が最後のチンピラの脳を揺らした。

*

「……やべ、やつすぎたかな」

周囲に横たわる屍（のみ）に動かないチンピラ（）を見下ろして呟く。

（早くこいつから立ち去らねえと風紀委員が出張つてくるかもしねえなあ……）

とここから立ち去るのとした時、絡まっていた少女に声を掛けられた。

「あ、あのー、ありがとうございました！」

「ああ気にすんなよ。それよりケガとかないか？」

「え？ あ、はい大丈夫です」

「そりやよかつた」

改めて少女を見ればそれは中学生くらいの女の子で、激しく見覚えのある制服を身に纏っていた。

というか、彼はこの少女を知っている。

「……湾内さん？」

「？ デリして私の名前を『』存知で？」

「いや、なんでもないんだ」

適当に誤魔化すが、何だか嫌な予感がしてきた。

あれ？ これつていつの間にか原作キャラに遭遇しちまうフリグ
じやね？

（湾内さんでいつも泡浮さんと一緒にいる子だよなあ）

確かに以前は絡まれているところを御坂美琴に助けられていた気が
する。

よく絡まれる子なんだなあ～

「あ、あのー……」

「ん？」

湾内さんが何か言いたそうだったのだととりあえず聞いてみる。

「お名前を教えて頂けないでしょうか？」

何だそんなことかと思い俺は田の前の可憐な少女に自己紹介する。

「俺は九十九桜華だ」

「湾内綱保と申します、助けて頂き本当にありがとうございました」

丁寧にお辞儀する湾内さんを見て何だか無性に愛着しきりを感じる。

……断つておぐが、俺は変態ロココではない。

「じゃ、俺はこのへんで失礼するわ」

そう言い残して路地裏から立ち去りつとした瞬間、聞きなれた声がこだました。

「風紀委員ですのーー。通報を受けて参りました。ここの方、ご同行願いますわよ」

振り返ってみるとそこには予想通り風紀委員、白井黒子の姿があるわけで、倒れているチンピラ二人をやつたのも俺だからあながち間違いじゃないんだけどやっぱり連行されるのは嫌なので。

「あーー、ひょっとお待ちなさいなーー！」

「こは逃げに徹します。

「うわーー！」

突然視界が逆さまになった。それが白井にされたことだと気づくのにそう時間はからなかつた。

「何故逃げるんですの？」

路地裏に仰向けに倒れている状態で仁王立ちで立つ白井。
なんというかアレだ、スカートの中がちらちらと
……

「あー、風紀委員さん？ そのスカートの短さは如何なものかと思
うんだが」

「そんなことはどうでもこいんですの。とつあえずついてきてもら
いますわよ」

ガチャンッ

俺の手に拘束具がはめられた。

「うふー！？ オイ俺なんもしてないってーー！」

「話は支部で聽きますわ。ゆづくつと」

後半部分をやけにいい笑顔で言つ白井。
わつきの嫌な予感がこれであったことを確信する。

ズルズルと引きずるような形で連行されていく俺。

そこで白井がようやく被害者の少女が湾内さんであるところと
に気が付いた。

「湾内さんではありませんの。では被害にあったところのはアナタ
だつたんですね」

「まあ白井さん。あの、その方をどうぞ？」

引きずられている桜華を見て心配そうに声を掛けてくれる湾内
さん。

「IJの方は私を守つて下さつたんですね」

「あーり、やつでした。では事情聴取どころになつますわね」

「風紀委員さん。誤解が解けたんだからIJの手錠外してくれよ」

「無理ですの。またいつ逃げるかわかつたもんじゃありませんし」

最早何を言つてもムダだらうと桜華は諦める。

いつぞやの銀行強盗が言つていした身も心も切り刻んで再起不能にする最悪の腹黒テレポーターというのもあながち間違つてないんだなと懶かに思ひ。

そんな彼と彼を引きずる白井、被害者の湾内さんの二人は一路風紀委員第一七七支部へと向かつた。

第一話 7月10日（後書き）

次回はあの花飾りと出会います。

第三話 電撃使い（前書き）

花とじでござりと出合ひます。

第二話 電撃使い

連れてこられたのは風紀委員第一七七支部。樋川中学の敷地内にあるこの詰所に、俺は拘束された状態で（強引に）連れてこられた。電子ロックを解除し、白井と桜華、湾内さんの三人が内部へと入る。

「初春～、只今戻りましたの～」
「あ、お帰りなさい白井さん～」

向こうのドアスクから餡玉を転がしたかのような甘ったるい声が聞こえてきた。

原作知識を脳内に詰め込んでいる元ヤクザは誰だか直感する。

というかさつき白井が名前呼んでたけど。

向こうから現れたのは頭に花飾りを乗つけた制服を着た少女、初春飾利。

「その方たちは誰なんですか？」

尋問用に座らされた桜華と隣に座る湾内さんを見て首を傾げる初春。

「Jの野蛮人は過剰防衛の現行犯ですの」「誰が野蛮人だオイ！！　俺は彼女を助けたんですけど…？」

隣で苦笑しながら湾内さんはただ見守っている。お願いだから何か言つてほしい。

「とつあえず名前をお聞かせ願えます?」

「九十九桜華だ」

「初春、バンクを調べてくださいな」

「ちょっと待つでね~」

白井の隣にパソコンを置いて座った白井がバンクへのアクセスを開始する。

(…あれ? ちょっと待つよ。俺つていの世界でどうこう扱いなんだ?)

もしかしたら身元がバレて学園都市から追放されるかもしぬないとか思い少しばかり緊張していると。

「…え~っと、あ、ありました。九十九桜華さん、転入生ですね。明日付けで柵川中学に転入する」とになります

(あ……そんな風になつてんのか。やるなアレイスター、根回しが完璧つてか)

「あ~、では学園都市に来て田が浅いんですね?」

「まあな。今日来たばかりだ」

「まあ、やつだつたんですか？」

「うひょひょひく口を開く湾内さん。

「まあアナタが湾内さんを守つたというのは彼女の証言からも解っていますし、転入生で右も左も解らない状態であつたといつなら今日は田を瞑りますわ」

「まじか。よかつたよかつた」

ふう、と息を吐いて背もたれへもたれかかる桜華。

「九十九さんて一年生なんですね」

「年上でしたの」

「ああ、それと他人行儀っぽいから俺の」とは桜華でいいぞ

「わかりました桜華さん」

屈託のない笑顔で微笑む初春。
癒されるわ。

「アナタは能力開発は受けてるんですね?」

「ああ、俺の能力は……」

そこまで言いかけてはたと止まる。

(能力のことなんて説明すりゃいいんだ……?)

「あ～、え～とだな…」

言い淀む俺を横目に、カタカタとキーボードを叩いていた初春が代わりに答える。

「ありました。九十九桜華さん、レベル1の『自動消滅』とあります」

「……そう、そんなやつだ」

全く聞いたこともないような能力名だったが、どうせアレイスターがまた上手くやつたんだろうと思いつの間にのっぽく。

「それはどんな能力なんですか？」

「半径50m以内の範囲で能力を消滅させる能力みたいですね。高度な演算能力を必要とするそのので使用制限があるみたいですが」

初春が画面をスクロールさせながら白井の質問に答えていく初春。体力面は絶望的なに情報面に関しては本当にすごい。

「では桜華さんは何故学園都市に？」

「…………」

また白井は鋭いところを切り込んでくるな。

「……家族の都合でな。いろいろあってこっちに来たんだよ

これといった理由が思いつかなかつたためそれらしい理由をつけ
て誤魔化すこと。

「……まあいいですわ」

いやそれ明らかに疑つてる眼だぞ白井。

「やういえば、もうそろコレ外してくれよ」

そう言つて未だに腕に装着されたままの拘束具を机の上にガシャンと置く。

「着けたままでも問題ないですかよ?」

「オイそれどうこう」とだ白井の野郎

「まあ冗談はこのへりにして」

「冗談に聞こえねえんだよ……」

渋々拘束具を外す白井に嫌なモノを感じる桜華。

「もう帰つていいか?」

「ええ結構ですわ。わたくしも湾内さんを寮まで送らなくてはなりませんし」

(ん……?)

何か重要なことを見逃している気がする。なんだろつないすげー
引っかかるてんだけど。

「そりいえば桜華さんは樋川中の寮に住むんですか?」

それだ!!

俺の家って何処だ?

「いやーまだ見てないから分からんのだよなあ……」

「なら今から調べてみましょうか。もう用意はしてあるはずですよ
ね?」

「多分」

再び初春がキー ボードをカタカタと叩きだす。ほんと初春つてパ
ソコン得意なんだなあ。俺なんか全くダメなのに。

「あ、ありましたよ。えーと第七学区の……私の住むマンションの
隣ですね」

プリントアウトした地図を桜華に渡しながら初春が囁く。

「お、サンキュー」

「いえ、ではまた明日」

「あれ? 初春はまだ帰らないのか?」

「まだ調べ物が残つてますから……」

「やつか。じゃまた明日な」

何の事を調べているのか少し気になつていていたが深入りはせずに俺は初春から地図を受け取つて支部を出た。

その帰り道。

「…………俺つてほんとなんでこいつな場面に出くわしちゃうわけ?」

学園都市にやつてきてしまだ一田田だとこうのこ、ほんとなんでこんなエンカウント率高いんだよ。

俺の田の前には十人程の明らかにヤンキーですといった男たち、その先には湾内さんと同じ常盤台の制服を着た少女。

(なんだかなあ、最近常盤台の娘は絡まるのがブームだったりするのか?)

やう思いつつも桜華の足は自然とそのヤンキーたちの所へと進んでいく。

(何か上條さんみたいな俺)

そんなことを思つて薄く笑いながら、近くにいたヤンキーの一人を思いきり蹴飛ばした。

「おひあ……」

גָּלְעָדִים חַנְקָה

頭にバンダナをしていたヤンキーがその蹴りで踞る。

「な、てめエ何のつもりだ!!」

リーダーらしいスキンヘッドのヤンキーが桜華を見て叫ぶ。

「あのさあ、俺もう今田一回田なんだよ」

ハアと溜め息をついて面倒くさそうに言い放つ。

「よつてたかつて中学生を囮みやがつて、お前らは口ワコソか？
少女大好きですかこの野郎」

「んだとこのクソガキが！！」

頭に血がのぼつたヤンキーの一人が桜華に向かつて鉄パイプを振りかざす。

「丁度いい、お前ら俺の能力の実験台になつてもらつぜ」

そう言つて桜華は目の前のヤンキーに向かつて先程還元して脳内にストックしておいた能力を発動する。

「食らひにやがれ！！」

そう言うとかざした桜華の右手から電撃が放たれ男に直撃、男は黒焦げになつてその場に力無く倒れる。

「うお、本当に使えた能力！！」

能力が使えたことでテンションが上がってきた。

「こいつ能力者か！！」

「電撃使い（エレクトロマスター）！？」 レベル4クラスだぞ今の
電撃！！」

本当に自分の演算能力によつて力が上乗せされるようだ。

「囮め！！ 大人数でやつちまえば大したことねえ！！」

スキンヘッドのハゲ（俺命名）が合図をすると残ったヤンキーたちが一斉に集まって円をつくる。

「面倒くせえなあ

大した警戒をするわけでもなく、退屈そうに言つ。先程絡まれていた少女に向かうためヤンキーは全てこちらにいるため少女は逃げただろうかとちらつとそちらを向けば、

……何だか頭からバツチンバツチン電撃を走らせている少女の姿。ここにきてようやく彼は気づいた。彼女が誰だったのかを。

（やべー！ 顔までよく見えなかつたから普通に割つて入つたけど
「イツは……」）

「……私を無視すんなああああああああ！」

逃げようとかそんなことを思つよつも前に、常盤台の少女のヨビ
と共に辺り一面に電撃が迸つた。

周囲にいたヤンキーはその一撃で完全にのそれてしまつてこる。

……ああ、神様。

俺はこんな上條さん的な初対面は望んでいませんでしたよ。
どうせならもつとお嬢様らしに店とかで……

「ちょっとアンタ……」

鼻息荒くこちらにズカズカと歩いてくる少女に向つて田に向
て俺はこの口最大の溜め息をついた。

「……なんだよ」

「勝手に人の獲物を横取りしてんじゃないわよ……」

うわこいつ確信犯かよ。

「それより、アンタも電撃使いなのね」

なんだか田をギラギラさせてこちらを見つめてくる常盤台の少女。
これは原作通りならあのパターンだ。

「私と勝負しなさい……」

やつぱりな……

あまりにも原作通りすぎて反応のしようがない。桜華は田の前少女、御坂美琴を見て思わず叫んでしまってなる。

(不幸だ)

彼の学園都市生活一田田はまだ終わらそうにならない。

第三話 電撃使い（後書き）

全然話が進まない……

早く学園默示録のプロローグも書きたいのに……

第四話　迷けるが勝ち（前書き）

短いです；
本日2話投稿。
後でキャラ設定を投下する予定。

第四話 逃げるが勝ち

あらすじ

なんだかビリビリした女の子に勝負を挑まれました。

「勝負しなさい……」

時刻はややそろ午後六時に差し掛かりつかとこいついね。
俺の田の前にいる少女、御坂美琴は意気揚々と指差して言ひ放つ
た。
てか指差すなよはしたない。

「……はあ
「なんで溜め息なのよ……」
「ビリビリさあ……」
「御坂美琴よ……」
「御坂さあ、何でそんな突っかかるの?..」
「アンタなかなか強そうだからよ」
「御坂つて超電磁砲のあの御坂美琴だろ?俺なんかが勝てるわけね
えじゃんか」

本当は勝てたりするんだけど面倒いとは御免なのでの、ひつへひつ
とやつ過いしす」と云。

「うるさいわね。男ならしゃれつとしおやーー。アンタも電撃
使いなんですよ?」
「いや違うって」「いや違うって」

「？」 アンタさつき電撃飛ばしてたじやない」

「ありや俺の能力だよ（あ、やべ……）……まあレベル1程度だけどな」

危ねー自分の本当の能力うつかり喋つてしまつてこりだつた。俺つて口軽いのかな、気をつけよ。

「嘘ね。さつきの少なくとも大能力者クラスはあつたわよ」

「そう見えただけだつて」

くそう、しつこい。

いい加減に新しいマンションに行つてぐつすり眠りたいのに。

奥の手を使うか。

そう決断した俺は御坂の後ろを指差して大声で叫ぶ。

「あ～～～！～ あんなところにツインツイン頭の少年が……」

「え！？ ピコよーー？」

（今のうちに、）

実は結標の座標移動も一緒に移動した際に還元して取り込んであつたため、それを使ってその場からテレポートする。

当然ツンツン頭の少年などいないため御坂が憤つて振り返つてみれば、

「何よビリ元もいないじゃな……あれ?」

先程の少年の姿なビビーにもなへ

「逃げられた———!」

御坂美琴の叫びだけだ夕方の学園都市に響き渡つた。

*

「よつと」

地図を頼りに自分のマンション近くまでテレポートした俺は歩いてマンションを探していた。

「しかしテレポートってかなり演算能力使うんだな……頭痛くなつてきたかも。……お、これか」

ようやく田の前にまだ新しさうなマンションが姿を現した。中に入り、管理人に経緯を話して部屋の鍵をもらつ。

「あー、疲れた……」

部屋の鍵を開けるなり俺はぐつたりと床に寝そべつた。

一日目だけでいろいろなことがありすぎた。退屈しない世界がいい

とは確かに言つたがいくらなんでもこれでは身体がもたない。更に今後学園默示録などという死亡フラグ満載な物語まで介入してくるといつのだから先が思いやられる。

「あ、ー、もう今日は寝るかなあ

時刻はまだ午後六時過ぎだが転生のせいか身体にはひとつと疲れが溜まっている。

明日からは中学にも通わなくてはならないため、今のうちに疲れを取り除いておいたほうがいいだろ？

と、そんなことを考えていると、不意に家の電話が鳴った。

不審に思いつつも受話器をとる。

「もしもし」

『やあ』

「何だアレイスターか」

『一日田ははどうだったかな?』

『どうもこうも疲れが溜まつてばっかりだよ』

『退屈しないだろう?』

『まあな。で?俺に何か用か?』

『ふむ、君の能力についてなのだが』

『なんだ、まだ何か使いづらいオプション付いてんのか?』

『君が還元して脳内にストックした能力があるだろ?』

『ああ』

『それにも使用制限があつてね。元々の能力者の貯蔵している1日

分の能力しか使えない』

『つまり使い捨てってことかよ』

『まあそういうことだ。そのストックが切れてもう一度同じ能力を使おうと思えば同じ攻撃を還元しなくてはならない』

「うつ わ燃費悪」

『それが君の能力なのだ。仕方ないだろ?』

「それは分かつてることだよ」

『ああ それと、君の部屋に通帳があると思うがそれは好きに使っていい。本来ならレベル5の君には相応の金額が振り込まれている筈だ』

当たりを見回して机の上に置かれていた通帳を発見した俺は中身を見て絶句した。

……何かりが見たこともない数くつついでいる。

「こぐらなんでも多すぎなんじゃねえかこれ」

『気にすることはない。その程度はした金だよ』

うわ、こんな金額をはした金つて言いやがったあの野郎。

「用件はそれだけか?」

『ああ、くれぐれも自分が八人目のレベル5あるとばれるなよ「ばれる時ばれるぞ?』

『……まあ それも面白いか』

ガチャンッ
ツーッー

一方的に通話が切られた。

何はともあれ何とか転生一日目を終えることができそうだ。

学園黙示録のときのことも考えて色々と下準備もしておかないと

いけないよな。

いやそれよりも田先の原作介入についてか？もういつそ原作がぶち壊すか、俺がいる時点で基盤である原作はぶつ壊れているわけだし。

「ふう、退屈する心配はこれっぽしきもなさそうだ」

用意されていたベッドにダイブして薄く笑いながら呟く。

ベッドに寝転がると疲れからか睡魔が襲いかかってくるが、今はそれが少し心地よい。

明日からの学校頑張るか。

そんな事を思いながら、襲いかかる睡魔に身を任せ俺は眠りについた。

第四話　迷けるが勝ち（後書き）

やつと一回終わった。
感想隨時受付中です。

主人公設定

九十九桜華

(つくもおうか)

前世で柄にもなく子供を助けようとした結果死亡。しかし魂だけは死んでおらず肉体だけを変えてとあると学園默示録がクロスする世界に転生することに。

前世では若くして組の幹部にまで登り詰める程の実力と人望があった。

享年22歳

身長：177cm

体重：66kg

転生後

身長：170cm

体重：60kg

転生以前は黒髪の短髪だったが転生後は濃いめのブラウンの髪で少し長め。（青ピ程度）

顔は割りと整つていて所謂美形。

前世では何故か組の中でラノベブームが巻き起こり禁書目録と超電磁砲は読破している。学園默示録については登場人物とゾンビがでてくるといったさわり程度。

能力は“超越還元”

リダクションオーバー

相手の能力に干渉してその能力に自分の演算能力をプラスした形で使用することができる。また攻撃を還元して使用することも可能。

発電系や発火系などの物理的な能力は攻撃を受け還元することで脳内にストックされるが空間移動系や透視、テレパスなどは相手のAIM拡散力場に干渉して脳内にストックする。ただし脳内には能力三つ分までしかストックしておぐことができない。それ以降は順番に消去されていく。

本来ならばレベル5デュアルスキルだが転生者というイレギュラーな存在であり尚且つ多重能力者に近い存在であるため研究所などからの目を誤魔化す為、原作を必要以上に破壊しないため通常はレベル1の“自動消滅”と名乗る事に。

利用価値やその利益によれば序列は第一位よりも上の第零位。実力的にもおそらくは学園都市最強。

転生後は14歳として初春と同じ柵川中学に通うことになる。

主人公設定（後書き）

これから設定は随時追加していく予定です。

第五話 7月11日（前書き）

短いですが「勘弁を（ - ” - ; ）
夏休みが終われば学園默示録のプロローグに入りたいと思います。

第五話 7月11日

ルルルルル、ルルルル

昨日の夜予めセッティングしておいた目覚まし時計のアラーム音で俺は目を覚ました。

「う~ん……」

ベッドから起き上がり腕を掲げて大きく伸びをする。

カーテンを開き、太陽の光を全身に浴びて身体を覚醒させる。

時刻は午前7時。

このマンションから転入先の柵川中学までは歩いて10分程度と近いため其ほど急ぐ必要もない。

俺はゆっくりとキッチンに向かい冷蔵庫の中から卵とハムを取り出して熱したフライパンに放り込んでハムエッグをつくる。その間にトースターにパンをセットしあ茶を注いで待つ。

ちなみに、前世でよく舍弟に手料理を振る舞つていたりした為料理の腕前はなかなか高かつたりする。

「いただきまーす」

焼き上がったトーストの上にハムエッグを乗せて上からマヨネーズをかけて食べる。

うん、美味ですな。

食事を終えるとキッチンを離れクローゼットへと向かう。

中には今日から着る柵川中学の制服が入っているのでそれに着替え

て鏡の前で身なりをチェック。

「…………うん、まあ」みんなもんだよな」

人生一回目の中学の制服に身を包んだ感想は新鮮。これにつきると
思う。学校 자체はあまり好きではないが退屈しない人生が送れるの
であればそれすらも嬉しく思えてくる。

「よし、行くか」

氣持ちを改め鞄を持ち、玄関を出て学校へと向かう。すると丁度マンションから出てきた初春と遭遇した。

初春

「あ、お世話になりました。」

とりあえず一人で一緒に学校にいくことに。

「今日からですね」

「ああ、今から楽しみだよ」

「桜華さんなら友達もたくさんできますよ」

「『シと微笑んでこちらを向く初春。あーもう可愛いなこんちくしょう!』

あれ？

「うーん、いいやつだね。」

ぱつさあ

と初春のスカートが御開帳。

見てない見てない、ピンクの水玉なんてこれっぽっちも見てないよ。

「お、今日はピンクの水玉かあ」

「ひやわああああ！？さ、佐天さん！…男の人もいるのに何している
んですかッ！？」

顔を真っ赤にして佐天に怒る初春。
その動作さえも可愛いなあオイ。

「え〜いいじゃん。スキンシップは大事だよ？それもういっちょ
！！」

「めぐらぬいで下さい…バサバサしないで下さい…」

もうこれ苛めなんじゃないかってくらいに初春のスカートをぱつさ
ぱつたと仰ぐ佐天。

「あれ？そういうえばそつちの人は？」

こちらに気づいたのか佐天が初春に尋ねる。

「あ、紹介します。九十九桜華さん、今日から樋川中学に転入する
んですよ」

「九十九桜華だ。よろしく」

「あ、佐天涙子です」

そう言つて握手する。佐天もなかなか可愛い。

「でも何でそんな人と初春は知り合いなの？……はッ！？まさか彼氏！？」

「ち、違いますよ！－何言つてんですか佐天さん！－」

全力で否定する初春。なにもそんなにムキにならなくても。でもなんでそんなに顔を真っ赤にしてるんだ？風邪か？

「ふうん、ちなみに桜華さん。今日の初春のパンツは何色でしたか？」

「な、なな、何言つてんですか佐天さん！－男子に聞くよくな」と
じゃないです！－

「ピンクの水玉」

「桜華さんも普通に答えないで下わー！」

何だか收拾がつかなくなつてきているので[冗談はさておいて初春たちと校舎へと向かつ。

「じゃ、俺職員室行かないといけないから」

「はい、ではまた」
「サヨナラ～」

初春佐天と別れて職員室へと向かつ。

「失礼しまーす。今日から転入する九十九桜華です」

「あ、あなたが九十九くん？私が担任の藤井です。よろしくね」

出てきたのは二十代後半くらいの綺麗な女性だ。ショートカットの黒髪にスース姿がよく似合つ。

「私は警備員アンチスキルもやつているから何かあつたら声をかけてね」

「よろしくお願ひします」

「それじゃいきましょうか」

一人は職員室を出て教室へと向かう。時刻はそろそろ8時というところだが、今日は授業の都合上8時からHRが始まるらしい。

「それじゃ呼ぶまでここで待つてね」

藤井先生に言われて2年1組のドアの前で待機することになった。教室内からは転入生がくるという知らせにテンションが上がっているのが生徒たちの声が聞こえてくる。
よかつた、楽しそうなクラスだな。

「それじゃ転入生を呼ぶから」

ガラツと扉が開き藤井先生が中に入るよつに促す。

俺はそれに従つて教室に入り、教壇の横に立つて生徒たちを見た。

……なんだか女子生徒の目線が痛い程に集中しているのは気のせいだらうか。

何だ？俺制服似合つてないのか？

「それじゃ自己紹介してもらひまじょ！」

そつ言われたので思考を一時中断して自己紹介に移る。

「えー九十九桜華です。学園都市には来たばかりで分からなうこともあると思うけど仲良くしてやつて下さい」

先生と話すときもさうだけど敬語つて疲れる。前世じゃ脅迫言葉のほうがよく使つてたからなあ。

「はいじゃあ何か質問ある人ー」

藤井先生がそつ言つとクラス中（主に女子）からバツー！と手が挙がる。

「彼女はいますか！！」
「好きなタイプは！？」
「能力者ですか！？」
「どこに住んでるの！？」
「付き合つて下さるー！」

なんか一個おかしいのがつだら今。

「多すぎるわね。今だけじゃ時間が足りないからまた休み時間にもしなれこ。ではHRを終了します、皆移動してね」

それだけ言つと藤井先生は出でていってしまった。

「移動？」

「あ、九十九くんは知らないよね」

クラス代表だという女の子が話しかけてきた。

「今日から身体検査なんだよ」
システムスキャン

第五話 7月11日（後書き）

ちなみに、

勝手に7月11日は木曜にしました。

7月20日から夏休みだといつながら土曜日じゃね？といつ勝手な
考えによるものです。

第六話 ハマース（前編）

はー、題名通りハマースに行かねばよ。

第六話 ファミレス

あらすじ

何だか今日から身体検査システィム「スキャンで半日授業らしいよ。

ということでおれ、九十九桜華は現在トイレにいます。
なんですか？

アレイスターに電話してくるからだよ。

『どうした』

『いや今日身体検査らしんだけどわあ、これってやっぱレベル1ぐ
らいに抑えるべき？』

『君は研究員たちの実験動物にされたいのか？』

『すいませんレベル1にします』

『間違つても君の本来の能力を大っぴらに見せびらかすような真似
はするなよ』

『わかつてゐよ、じゃあな』

ピッ

『はあ、ちょっとは全力で能力使つてみたいと思つてたんだけどな
あ……』

切り刻まれてホルマリン漬けにされたくはないので自重しよう。

トイレを出てグラウンドへと向かう。

「あら九十九君、遅かつたわね。君の番よ」

担当が藤井先生だった。全く知らない先生よりはやりやすいよな。

「では葛城さん、ようじくね」

葛城さんは先程俺に話しかけてきたクラス代表のことだ。
なんでも彼女はレベル3の風力使い（エアロマスター）らしい、俺
の検査の為に能力を使用してくれるらしい。

「行くわよ九十九君」

「来い代表」

「ゴオッ！」

と突風のような風が渦を巻いて一直線に俺へと向かってくる。レベ
ル1設定なので身体ギリギリまで引き付けて消さなくてはならない
のでなかなかに緊張感がある。だつて間違つて当たつたらこれ痛い
じや済まないだろうよ。

「よつ、と」

俺は突風を身体から数センチの所で消滅せることに成功。

「葛城さん、九十九くんが続けられる限りやってちょうだい」

「わかりました」

その後四回程同じ動作を繰り返したあたりでギブアップを宣告し結果を待つ。

『記録　消滅限界回数、5／h。消滅限界範囲、4・8cm。総合評価　レベル1』

レベル1判定を受けて実験動物にならなくてすんだ安堵とレベル5を叩き出せなかつた残念さが一度に襲いかかってきた。
まあ退屈しない人生ならいいや、低能力者でも。

身体検査が終わり、俺は葛城クラス代表と話しながら教室へと向かっていた。ちなみに俺は代表と呼んでいる。

「九十九君の能力って便利よねえ」

「演算が複雑だからそんなに乱発できないけどな。代表のほうがすごいじやんか、レベル3だう？」

「レベル3なんて『口口』口口いるわよ。それに私はまだまだレベルを上げるつもりだし！！」

拳を握りながら宣言する代表。この性格なら御坂と氣が合つかしれないなあ。

「ところで九十九君」

「何だ代表」

「それよ

「？」

「代表って呼ぶのやめてくれない?」

「何で? 分かりやすくていいと自分では思ってたんだけど」

「……な、名前で呼んで欲しいから」

「わづか、なら葛城さん」

「…………もうそれでいいわ」

なんだか全てを悟ったような表情で空を見つめている葛城さん。何でそんな遠い目をしてるんだ?

半田といつともありそそくさと授業が終了した桶川中学を出て、とつあえず学園都市を探索してみようと思い現在第七学区を途中で合流した初春佐天と共に歩いている俺。

「へ~桜華さんの能力って便利そうですね~」

佐天が俺の能力を聞いて感想を言つ。

「そんな便利な代物じゃねえよ。使用回数だってあるし効果範囲は身体から数センチだし」

「でも能力を消滅させるってなんかカッコイイですよね~」

そう言う佐天は先程までは違つ雰囲気になつてゐる。

そういえば佐天はこの後レベルアップパーとかいうのに手を出して意

識不明になるんだっけか。俺としては阻止したいけどあれは初春と佐天の友情が深まる大事なトコだしな。俺がそこに介入するわけにはいかないかな。

まあ適度に原作はぶつ壊すつもりではいるけどな。

「とりあえずどこか店に入りましょうか。外は暑いですし」

初春の提案に従つて俺たちは近くのファミレスに入ることにした。丁度昼時ということもあり店内は学生で賑わっている。俺たちは窓際の席に向かい合つて座り、オーダーをとりにきた店員さんに注文する。

「俺はハンバーグのAセットで」

「私はカルボナーラとアイスティー」

「私はジャンボチョコレートパフェとショートケーキで」

……おい初春。

それは昼飯じゃないんじやないか？

と不審な目で初春を見ていると向こうも気づいたのか目が合つた。
「何で目を逸らす？顔も赤いしやっぱり風邪でもひいてんのか？」

「せついいえば来週から夏休みだよ～」

佐天が思い出したように切り出す。

「そうですね。宿題さえなければいいんですけどねえ」

初春は何だか遠い目だ。

「あ、でも私近いうちに田井さんに御坂さんと会わせてもらいたいんだ。
うになつたんですよーー！」

先程の遠い目から一転して目をキラキラさせながら語る初春。そういえばお嬢様に異様に憧れてたんだつたな。

「え、その人って常盤台のレベル5でしょお？ああいう人って人を下に見るじゃん？むかつくんだよね～」

「そんな」とないでですよお」

「だいたいお嬢様つて……」

「いいじゃないですかお嬢様！！！え、お嬢様だからいいんじゃないですかあ！！！」

初春がどこかにトリッキーしてしまいました。とりあえず「うちの世界に呼び戻すか。

「初春へ、帰つてこい」

ムニツ

「ひやわあッ！？」

頬を引つ張つてこつちに呼び戻す。

「おまたせしましたー」

そういうしている間に注文した料理をウェイトレスさんが運んでき
た。

……うん、やっぱ初春のはナイと思うわ。何そのボリューム、
本人は笑顔で食ってるけどそれもう大食いにチャレンジするレベル
のボリュームだかんね。

「やっぱええば桜華さんて横川中のマンションに住んでるんですね」

佐天がふと言ひ。

「ああ。初春の住んでる女子マンションの近くの男子マンションだ」

ハンバーグを口に放り込みながら佐天に言ひ。

「今度お邪魔してもいいですか？」

「おおいいぞ。何もないけどな」

「わ、私も行つていいですか！！」

いきなり大声で詰め寄つてくる初春。

何だよそんなに俺の部屋見たかったのか。

「 もちろんいいぞ」

俺はそう言つとセットについていたスープを飲んで一息つく。こん
なまともに食事するの久しぶりな気がするなあ。

前は舍弟に弁当貰わせに行つたりもしたけど、これがいいな、うん。

そんなのほほんとした平和な雰囲気は、ファミレスの入口辺りで叫んだ男の一言によつて壊く崩れ去る」となる。

「強盗だ！お前ら動くんじゃねえぞ！――！」

……ホントに、
なんでこんなイベントばっかり発生するのかねえ……
俺の周りにはヤンキーと強盗しかいねえのか！――

第六話 ハマリレス（後書き）

ちなみに桜華は超がつくほど鈍感です。
そしてヤンキーや強盗に対して極端にフラグ体质ですww

第七話 ん、 もう? (前書き)

桜華ってどんなヤクザだったんだね? なあ (笑)

第七話 え、もう？

えーと、

俺たちのいるファミレスが強盗に占拠されました。

「動くんじゃねえ！！」

「ここれから出るんじゃねえぞ！！」

「早く金を詰めろーー。」

つたく昨日からこんなのに巻き込まれてばっかりだな俺。
好かれてんのか？

「う、初春……強盗だつて……」

心無しか佐天の声が震えている。無理もない、予告もなしにいきなり命の危険がある現場に放り込まれたのだから。

「お、落ち着いて下さい佐天さん」

流石は初春。

風紀委員なだけはあってこいつ突発的な出来事にも冷静に対応できている。

……さて、

これからどうしようか。

敵は見たところ店内に8人、入口に2人の合計10人。

「ひつぞり脱出するには少々無謀な人数だな。

幸いにも俺たちの座っている窓際の席から強盗たちが今集まっている会計近くの通路は対極に位置している為にちらりと田は余り向かい。

「（初春、IJKの監視カメラの映像パソコンに出せぬか？）

離れてはいるが一応強盗たちに聞こえなことひつぞりと初春に尋ねる。

「（あ、ハイ出すことは可能です）」

「（ならその監視カメラの位置から強盗たちの死角にならうな所を探してくれ。アンチスキル後警備員にも連絡だ）」

「わ、解りました」

そつとうと初春はパソコンを膝の上に置いて極力強盗に見つからないよう静かにキーボードを叩く。

「（桜華さん、どうするつもりなんですか？）」

初春の隣に座っている佐天が心配そうに俺に尋ねてくる。

「（決まつてんだろ、強盗たちを捕まえるんだよ）」

「（な、無茶ですよ！警備員が来るまで待つたまつが……）」

「（その前に逃げられちまつたら意味がないだろ）」

佐天を諭すように言つ。

「（それに安心しろ。奴らが持つてゐる拳銃はただのモデルガンだ）」

「（そんなこと分かるんですかー？）」

「（まあな。色々あつて実銃には毎日触れてたからな）」

今一度言おう。

俺、九十九桜華は元暴力団、所謂ヤクザの幹部だ。
故に刀、拳銃、トンファーなどの武器については一般人を軽く凌駕する知識と経験を有している。

その経験から言わせてもらえば奴らが持つてゐる拳銃は全てモデルガンだ。精巧に造られてはいるが所々に実銃とは明らかに違うパツや箇所がある。更に言えば強盗たちの銃の構え型も素人ですと吐露しているようなものだ。もしあんな状態で本物の銃の引金を引いたら反動で肩が外れるだろう。

「（桜華さん、出ました。死角になるのはこの通路の角ですね）」

このファミレスのシステムに侵入し監視カメラの映像を写したパソコンの画面を俺に見せながら言つ初春。
さすがは“守護神”^{ゴルキーパー}、情報戦において初春よりも上のやつなんてアレイスターぐらいしかいないのでないだろ？

「（よし、今から俺はあいつらを捕まえに行く）」

「（ホントなら風紀委員として一般人のこうこうした行動は止めるべきなんですが……）」

「（こういう場合はしょーがねーだろ。それに初春じや人質になるのがオチだしな）」

ג' ע' (..... ג')

初春肉体券衝はからつきしだからなあ。

とレバか女の手に「んな」ともれせぬ氣なんでサハサハナシト

一度強盗たちの方へと視線を向ける。

と一矢を頂いて人質を取て逃走する。モリたのが人質とする人間を選んでいる。

思ひながら、ぐんと行動を開始する。

と匍匐前進で移動する。

なるほど、確かにここからだと強盗たちからは丁度見えないな。角までやつてきた俺はこれからどうするか考えていた。

(今俺の中にあるのは結標の座標移動とチンピラの電撃使いかよし)

頭の中で作戦を建てた俺はそれを実行するべく強盗たちの殲滅を開始する。

まず始めに狙うのはファミレス外の入口で見張りをしている一人。こいつらは会計にいる強盗たちとは多少なり距離が離れているため瞬殺すれば異変には気付かないだろう。

……というわけで、

ボンツ

見張りをしていた男の一人の背後にテレポートし直ぐ様電撃をスタンガンの用に使って気絶させる。

レベル4クラスの電撃だ、そう簡単には目覚めたりしないだろ？

「ツー？なん」

もう一人が俺に気づいたが直ぐ様目の前にテレポートして同じ要領で気絶させる。

「うし、とりあえず第1段階はクリアだ」

気絶した二人が中の強盗たちに見つからないように足を持つて身体を引きずりながら店の裏へと運ぶ。

「さて、次は……」

俺は中の強盗を殲滅すべく店内へとテレポートした。

「よつと」

「（うわあー！？）」

驚いて声を上げたのは強盗たちではなく目の前にいる初春と佐天だ。俺は先程のテーブルにテレポートしている。理由は単純、初春にやつてもらいたいことがあるからだ。

「（初春、この店のカーテン閉めて照明落とせるか？）」

「（できませんけど……何するんですか？といつから今のつてテレポート）」

「（その話は後だ。とつあえず今はそれを直ぐにやつてくれ）」

「（わ、解りました）」

言つやいなや初春が凄まじいスピードでキーボードを叩きあつとう間にシステムに侵入。

自動開閉式のカーテンがゆっくりと閉まり始めた。

「なんだあ！？」

「誰がこんな」とやつてやがる！――

「探せ！――」

突然カーテンが閉まり始めたら強盗たちだつて気付くが、これはまあ仕方がない。

次の段階になればすぐにケリはつくだろう。

ガチャンッ

何かを落とすような音と共に、店内の照明が全て消えた。

「今度は何だ！？」

「何が起きてる！――」

「早く照明をつける！――」

「誰がやつたんだ！――」

強盗たちが慌ただしくなる。

「（初春グッジョブ！…）」

そつと俺は座っていたテーブルから強盗たちのど真ん中へとテレポート。

「よし、お前の全體監殺しだあ」

極めて明るく言い放つ。本心を言えば、「てめえら俺の平和を踏み滲りやがって生きて帰れると思つたじやねえぞ」「だう」。

今度は入口にいた二人みたいに悶絶させてハイ終わり、みたいにはしないぜ。

俺今めちゃくちゃ苛々してるから。

「…? 誰だお」

強盗の一人がその言葉を言い切るよりも早く、俺は電撃を撃ち込んだ。

「あやああああ…」

黒焦げになつて床に転がる強盗A。この程度で終わると思つたじやねえぞ。

ヒュンシ

と軽い音をたてて黒焦げの強盗Aが強盗Bの頭上へとテレポート。そのまま重力に負けて強盗Aの身体が強盗Bの脳天に直撃する。

「おうぶし！！」

強盗A（推定体重100kg）が脳を揺らした強盗Bは力無く強盗Aの下敷きとなり意識を手放す。

あと六人。

「な、誰だてめえは！！」

暗闇に少しずつ目が慣れてきた強盗たちが俺を見てモデルガンを突きつけてくる。

はあ、こんなもん脅しにもなんねえよ。

ヒュンッ

と音をたてモデルガンを突きつけていた強盗Cのモデルガンには強盗Dのモデルガンが埋まっている。もちろん結標の能力だ。

「なあッ……！？」

それ以上何もすることを許さずじを電撃でこんがりと焼く。モデルガンを失った強盗Dには強盗Cの脳天プレレスをプレゼントして氣絶してもらつた。

あと四人。

「ん……」

気づけば残りの四人に周りを囲まれていた。俺としたことが。

「ガキい……よくもやつてくれたなあ！！」

強盗Eが叫ぶ。

「ぶつ殺す、てめえはぶつ殺す！！」

Eはモデルガンを床に捨て、ポケットからナイフを取り出す。

「チツ、いきなりエモノだしやがつて」

「死ねおらあ！..」

ナイフをこちらに向けて突き出してくる。俺はそれをテレポートで避けEの後頭部上に移動、そのまま白井のようにドロップキックをぶちこむ。

一度やつてみたかったんだよなーこれ。

「「「ううあああ！..」」

む、次は強盗FとGが一人ががりか。

「甘いんだよ！..」

バリバリイツ！..

と御坂には及ばないが中々の高圧電流を一人に流し込み氣絶させる。あと一人。

「くそツ！..」

あ、逃げやがった！..

うわ、いつの間にか人質とつてやがるし。

「動くんじゃねえぞ！！動けばコイツの命はねえ！！」

……だがまあ、

コイツが馬鹿で助かつた。

だつて人質の女子校正に向けてるの、あのモデルガンだもん。

「はいどーん」

座標移動で人質の女子校正をこちらにテレポートさせ、それと入れ替わりになるようにして俺は男の懷の中にテレポート。

一瞬にして人質としてモデルガンを突きつけているのが女子校正から九十九桜華に入れ替わる。

強盗Hはそのことに気がつき顔から血の気がサーッと引いていく。対して俺は今日一番の笑顔で言った。

「くたばりやがれ」

バチイツ！！

直前電撃を打ち込み最後の強盗を氣絶させる。

「……ふう」

一件落着して一安心しているとワアミレス店内からワアツーーと完成が巻き起こった。

「なんだなんだあーー！」

どうやら店内にいた客たちも暗闇に目が慣れてしまい桜華が強盗たちをなぎ倒していくのが見えていたらしい。

「あの、ありがとうございました！」

先程人質に取られていた女子校正が頭を下げてお礼を言つてくれる。

とそんな時に、

「風紀委員ですのーーおとなしくお繩に…………うえ？」

うん、場違い。

その後、駆けつけた警備員によつて強盗たちは逮捕されて連れられていった。

店内にいた人達にものこの事件については他言無用といふことで緑口令を敷き、各自帰宅の途についた。

……ただ、

店内に俺と白井、初春、佐天を残して。

「…………」

冷や汗ダラダラで姿勢良く席に座る俺の向かい側には怪訝な顔の白井とビックリしている初春、そして目をキラキラしている佐天が横並びに座っている。

「…………さて桜華さん、どうぞ何か説明して頂けます?」

白井の目が怖い。

「…………何を?」

「忽けないでくださいな。初春たちの言ひてこぬことについてですわ」

「桜華さんてテレポーターだったんですね?」

初春が不思議そうにうらやまを見ている。

「…………違つよ」

「なら何故テレポートを?」

「話さない」とダメか?」

「話して下さいな」

はあ、

と俺は大きく溜め息を吐く。

アレイスター、俺転生一日田でばれそつだわ。

やがて諦めたかのよう、「ん、俺はやつくり口を開いた。

第七話 え、もう? (後書き)

はい、ばれます

第八話 風紀委員（前書き）

自分でも想像しない方に話が進んでいく（笑）

第八話 風紀委員

「…………じゃなんだから風紀委員の支部に移動しないか

開口一番、俺は田の前の二人に向かつて言った。

「…………ではいけませんの？」

「色々と話しづらることもあるし、セキュリティがしつかりしてるのが支部なら盗聴の心配もないだろ？」「

「盗聴……？」

佐天が驚く。

隣では初春も同様に田を白黒させていた。

「……聴かれではマズイことなんですか？」

「まあな、それにお前らだつて危険かもしれない。俺の話を聞く以上、ある程度の覚悟はしておけよ」

「……解りましたの。支部へ移動しましょう」

白井がそう言ったので俺と初春、佐天の全員が立ち上がり警備員がいるフアミレスを後にして風紀委員第一七七支部へと向かつた。

*

「さて、では洗いざらい吐いていただきますの」

支部の中、応接用の机を囲む四人は桜華と佐天、その向かい側に腕を組む白井とパソコンを起動させている初春が座る。

「何を聞きたいんだ？」

「まずはアナタの能力ですわね。書庫の“自動消滅”のレベル1といつ情報、これは偽造ですかね？」

「…………何故そつ思う？」

「アナタの事を少し調べさせて頂きましたの。書庫のデータには過去の情報は全くありませんし、なのに能力だけは記載されているなんて可笑しいですわ」

「で、極めつけはさつきの俺の行動か？」

「ええ、初春たちの証言によるとアナタは空間移動や発電系の能力を使用していたそうですね」

「すいっ

と白井が詰め寄るかのように俺に顔を近づける。
近い近い、近いし目が怖え。

「单刀直入に聞きますわよ。アナタ、デュアルスキル多重能力者ですか？」

「……ふ」

やばい、笑いが堪えられない。

「アツハツハツハーー！」

余りにも真剣な白井の表情を間近で見てとうとう我慢できずに笑い出してしまう。

「何が可笑しいんですの？」

「アハハ……いや悪い。余りにも真剣に白井が間違ったこと言いつもんだから……」

腹を抱えてヒーヒー言いながら顔を机に埋める俺に白井は冷たい視線を送る。

「では一体アナタの能力は何なんですか？」

そろそろ白井がキレそなので俺もふざけるのはよそつか。

「ふう」

先程までの雰囲気を払拭し真面目な表情になる桜華に白井や初春、佐天も顔を強ばらせる。

「もう一度だけ聞くぞ。本当に覚悟はあるんだな」

「愚問ですわね」

「はい」

「教えてください」

満場一致か。
仕方ないな。

「まず俺の能力だが、 “リダクションオーバー超越還元” つて代物だ」

「超越還元？」

「詳しくは俺も知らんがな。なんでも相手の能力を打ち消したり使用したりできる能力らしい」

「……それでテレポートや電撃を使用していましたのね」

「ああ。まあいろいろ不便なところもあるけどな」

「レベルは何なんですか？」

「5だ」

「「レベル5！？」」

桜華の発言に初春と佐天が綺麗にハモる。

「でも何か事情があるらしくてな、表向きには俺はレベル1扱いなんだよ」

「どうして発表しないんですか？すごいことなの」

隣で佐天が質問してくれる。

「そこまでは知らないけどな、序列は“第零位”。裏のレベル5つでとこうだよ」

ギイッ

とあらかた説明できる事をし終えた俺はイスの背もたれに身を預けて天井を仰ぐ。

そこで今まで顎に手を置いて何やら提案していた白井が口を開いた。

「桜華さん、風紀委員に入る気は」やこません?」

「は?」

突然の提案に呆けた声が出てしまった。

「俺は面倒くやこ」とは嫌いなんだよ」

暴力団故の性格なのか、俺は面倒事が大嫌いだ。

「そんな悪い話ではないと思うんです。非公式ではありますがレベル5のアナタが加入して下されば風紀委員としては願つたりですしアナタも余計なそちらの不届きな輩に絡まれることも無くなりますわよ?」

「……にしても確か風紀委員って半年くらい訓練しないといけないんだろ」

「その点は問題ありません。今回の事件を解決したのが桜華さんであることとは警備員や風紀委員が承知していますしわたくしが推薦人として報告すれば訓練 자체は免除されるはずですの」

「ふむ……」

俺は別にそういうのチンピラギも絡まれることは面倒だとは思っていない。

寧ろストレス発散できるのだから歓迎する。

だが昨日のよう一日に何度もあんな事があると流石にイライラしてくるな。

「うーん……」

(俺が風紀委員になる、ねえ……考へてもみなかつたな。頭の中は原作ぶつ壊すことといつ来るか解らない默示録でいっぱいだつたし。……いやでも風紀委員になれば一般人よりも早く情報は入手できるんだよな)

「お前らは俺が風紀委員に居た方がいいのか

白井と初春に質問してみる。

「桜華さん程の実力なら大歓迎ですわ。多少好戦的なのは多めに見ますの」

「そ、そうですね。私も桜華さんが風紀委員に入ってくれたら嬉しいです……」

白井と初春は同様に歓迎してくれるようだ。しかし初春、何故に顔を赤くしてもじもじしてるんだ。トイレか？

「……そ、うか。まあ風紀委員てのも悪くないな

「それでは　」

「ああ。俺でいいならせりせてもいい。此処なら過度する罪も無さ
そうだしな」

「ヤツ

と俺は笑って向かい側に座る田井を見る。

白井もこぢらを見て笑っていた。

ん?何だか白井の貼り付けたような笑顔に違和感を感じるんだが。

「では桜華さん、これにサインと必要事項を記入して下さいな」

バサアッ…!

と能面のような笑いを顔に貼り付けた白井が机上に風紀委員申込の書類を広げる。

「…………おい、こいつのは免除になるんじゃないのか」

「免除になるのは半年の訓練のみですわ」

俺の怒氣の籠つた問いかにもしれっと答える白井。

「イシわざとやりやがったな。

「裏までびつしつあるじゃねーか…!」

「しっかり書いて貰いますわよ?」

昼食をとるためにフアミレスに行つたのだが気づけば口が暮れてい
た。

昨日今日と巻き込まれすぎだろ俺。

いつそ引きこもってみるか？いやそれだと下準備なんてできないよな。

頭を抱える俺には白井は一矢口つと言ひ放つた。

「書き終わる迄帰しませんわよ」

初春と佐天は書類の前にしつちひしがれる桜華の姿に苦笑いするしかなかつた。

第八話 風紀委員（後書き）

といつわけで桜華は風紀委員になっちゃいました（笑）
原作開始はまだ先かなあ……

早く默示録書きたい；

第九話 7月16日（前書き）

ようやく原作開始です

第九話 7月16日

本日は7月16日（火）
いよいよ今日は超電磁砲の原作開始の日だ。

え？

いつの間にそんな時間たつてるのかって？
そこは気にしたら負けだ。

でもまあ風紀委員の書類を書いた日から何度か白井と一緒に学園都市を巡回してみたけどあんなに不良どもがいるなんて想像していかつた。

おかげでストックしてあつた座標移動と電撃使いはもう使えなくなつてしまつた。

まあよく白井のテレビポートで移動するため座標移動についてはあまり後悔していないが。

そんなこんなで今日である。

今日も身体検査システムスキャンで半日授業であり、何やら初春がさつきからそわそわしている。

そういうえば今日は初春や佐天が初めて御坂と会う日なんだっけか。

……俺はこれまで何回か御坂に勝負を申込まれてるから一応顔馴染みだ。
嫌な顔馴染みだな……

「早く行きましょう佐天さん桜華さん……お嬢様が待つてますよー。」

「！」

「いや初春、私は——おじはなの初回限定CDを買いたい……」

「俺も今日は買ひ出し行かないと」

「そんなの後でもいいんです……お嬢様は待つてくれませんよ……」

いや白井や御坂はいなくならねえよ、とツッコミたいが初春はそんなことより早く行きましょう……と鼻息荒く田をキラキラさせてい

るため佐天と一人で溜め息をつく。

仕方ないなあと咳きつつ白井たちが待っているであろう例のファミレスへと向かった。

*

「……オイこれはどんな状況なんだ」

思わず口に出して言ってしまった。

状況を簡単に説明しようか、……ファミレス前まで行ってみれば何やら騒がしかったので店内を覗いてみたら御坂の膝の上にテレポートした白井が電撃を喰らっている場面に遭遇した。

周りの客や店員が明らかにひいている。

お、

白井が俺たちに気がついた。

……あ、

御坂も俺に気づいた。お願ひだからそんなバッチンバッチンさせないで貰いたい。

どうやらこれから行く予定でもあったのか御坂と白井がファミレスから出てきた。個人的には冷房が適度に効いた店内でゆっくりしたかったのだが。

「ちよっとアンタ！－何でアンタがここにいんのよーー！」

ズカズカと大股で歩み寄つてくる御坂。

「…………はあ」

「なんで溜め息なのよッ！」

「俺はムリヤリ連れて来られただけだっての、勝負なんかしねえからそのバチバチしてんのやめる！」

ホント会うたびに勝負しようと申込むのは勘弁してほしい。

俺が風紀委員だと言っても信じてもらえないし、上条さんの苦勞が少し解る気がする。

「あら桜華さんではあつませんの」

「よッ、白井」

「黒子？コイツと知り合いなのー？」

「知り合にも何も同じ支部の風紀委員ですわ

「……アンタ本当に風紀委員だつたの？」

「だから言つたじゃねえかよ。あの時はまだ腕章が配布されてなかつただけだ」

「どうかお姉様と桜華さんが知り合いだつたというのがわたくし驚きですわ」

「ま、まあ色々あつて」

「色々じやねえだろ。御坂が一方的につつかかつて……」

「うつさいわね！！アンタが逃げるのがいけないのよーーー！」

「風紀委員が無闇に喧嘩なんぞできるか！！」

「あの～……」

今まで完全に空氣だつた初春が申し訳なさそうに言つた。

「といつわけで、とりあえず」紹介しますわ。」

白井がそつとつうので御坂は俺につつかるのを止めて白井の隣に下がる。

「ひら櫛川中学一年、初春飾利さんですの」

「は、初めまして。初春飾利です」

「それから……」

「どーもー、初春のクラスメートの佐天涙子でーす。何だか知らなければどつてきちゃいましたー。因みに能力値はレベル〇でーす」

「あ、佐天さん何を」

「初春さんに佐天さん、私は御坂美琴。よろしく

「どうちらが……」

「九十九桜華でーす。何だか知らないけどじてきちゃいましたー。
因みに能力値はレベル1でーす」

佐天の自己紹介を真似てお茶田にやつてみたのだが、

「アンタは私を舐めてんのかああーーー！」

バチバチイー！

ざつと2億ボルトほどの電撃を浴びせられた。まともに喰らえば間違いなく死ぬのでもちろん還元したが。

「お姉様……」

「いい加減諦めろよ御坂ー。お前の攻撃効かないんだからさーーー

「う、うるさいわよーーー！」

話が進まないので俺と御坂の攻論（え？字が違う？いや合ってるよ
だって御坂だもん）は割愛。

「ま、こんな感じにしてもしょーがないし。とりあえずゲーセン
行こつか

「ゲーセン、ですか？」

佐天が鳩が豆鉄砲くらつたような顔をしている。

「ほら黒子行くよー」

「もう、お姉様つたらゲームとか立ち読みではなくもつといふお花とかお琴とかご自身に相応しい趣味をお持ちになれますんの?」

「うわ。大体お茶やお琴の何処が私らしいって言ひのうのよ」

「……なんかさ、全然お嬢様じゃなくない?」

奇遇だな佐天。

俺もつくづく思つてたどこだ。

「上から田線でもないですねえ」

初春が何やら紙を見ながら言ひ。

「? 何それ」

「新しいクレープ屋さんみたいですね。先着100名をまじで「太マスコットプレゼント」

「何このやつすいキャラ。今時こんなのに食い付く人なんて……」

ドンッ

佐天が立ち止まる御坂の背中にぶつかった。御坂も初春と同じ紙持

つてるな。

「すみませ……ん？」

「御坂さん？」

「どうなさいましたのお姉様……あらあ？ クレープ屋さん[じ]興味が？ それとも、もれなく貰えるプレゼントのほうですか？」

「な、何言つてんのよ！ 私は別にゲコ太なんか。だつて蛙よ？ 両生類よ？ どこの世界にこんなもの貰つて喜ぶ女の子が……」

「「あ」」

初春と佐天が同時に気づいて声ができる。

目線の先は、もちろん御坂の学生鞄に付いているストラップなわけで、それに気づいた御坂は顔を赤くしているし白井は必死に笑いを堪えている。そう言う俺は大爆笑しているが。

「うわー、すつじこ人」

やつてきた広場には学園都市見学にやつてきた子供たちが大勢集まっていた。

確かに休憩でここに立ち寄ったんだよな、といつかバスがここに停まらなきゃ佐天は顔を蹴られなくて済んだんじゃないかな？

「タイミングが悪かつたみたいですね」

列の最後尾に並びながら初春が苦笑しながら言ひ。

「先にベンチを確保してまいますわ」

「あ、じゃあ私も。佐天さん、私たちの分もお願ひしますね」

「え、ちよつ……あ」

佐天が振り返つてみればそこには腕を組んで落ち着きなく指をトントンしている御坂の姿。

「え? 何?」

「いいえ……」

「佐天、御坂はこいついう奴だから」

御坂の後ろに並んでいる俺は佐天に言ひ。

「……あの、順番替わります?」

パアツ

と御坂の顔が晴れやかになる。

「あ、別に私は順番なんて……私はクレープさえ買えたらそれで……いい」

俺たちの隣を走り去つていく子供たちの手にあるゲコ太について目がいつていまう御坂。

「お待たせしましたー。はい、どうぞ」

店員さんが佐天にクレープと一緒にゲン太を渡す。

「最後の一回ですよ」

「どうも……って、え? 最後?」

ドサツ

佐天がそう言った直後、俺の目の前で御坂が項垂れた。
なんだよやっぱ欲しかったんだな。
その身体からは悲壮感が漂っている。

「……あ、あのぉ

見るに見かねた佐天が御坂にゲン太マスコットを渡す。

「よかつたらこれ」

「えー? いいのー? ホントにいいのー? ありがとおーーー!」

「おい御坂早くクレープ買つてくれよ、後が詰まつてゐる」

「あ、そ、そうね。佐天さんありがとうーー!」

先程までの悲壮感はどこやら満面の笑みでクレープを買つ御坂。

そのままスキップで白井たちのところへ向かっていった。

ベンチに座りながらクレープを食べる。

ん、まあまあだな。

因みに俺は甘いものが苦手なので生クリームとかチョコとか一切入っていないクロックムッシュを注文した。

目の前では白井が御坂に自分のクレープを食べさせようと走り回っている。

「よかつたですね」

「え？」

「御坂さん、お嬢様のイメージとはちょっと違つたけどずっと親しみやすい人で」

「ん……どうなんだかねえ」

「そういえば桜華さんは御坂さんと知り合いだつたんですか？」

「ん？まあ知り合いつつ一か会うたびに勝負挑まれてたらいつの間にかこんな感じになつてたんだよな」

クレープを食べながら勝負を挑まれるたびに逃げ回つたことを思い出す。

あれ？何でかな、涙がでるよ。

「ん？」

初春が後ろの通りを見ながら何か気づいたように言う。

(チツ、やつぱりこうなるのか)

俺は人知れず舌打ちする。退屈しない人生は送りたいがそれによって佐天みたいな一般人が傷つくのは嫌なのだ。前世でもカタギには手を出さなかつたしな。

「どうしたの初春」

「いえ、あそこの銀行なんですけど……何で昼間つから防犯シャツ
タードろしてるんでしょうが」

初春がそう言つた瞬間、

ドガアアアンッ！！

いきなり防犯シャツターが爆発した。

「え！？ なんなの！？」

佐天が耳を押されて状況を把握しようとする。白井はすでに風紀委員の腕章を取り出しベンチを踏み台に通りへと飛び出して行く。俺もそれに続いて通りに飛び出す。

「初春……アンチスキル警備員に連絡だ、それと怪我人の有無の確認。急いでく
れ！！」

「は、はい！！」

「黒子！！」

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持はわたくしたち風紀委員のお仕事、今度こそお行儀よくしていてくださいな」

そつと面つ白井と俺は走り出す。

「つたく昼間つから強盗なんてくだらないことじやがつて

「桜華さんは銀行内の状況を調べてくださいな。わたくしは犯人を
取り押さえます」

「おう、気をつけるよ」

「もちろんですわ」

そう話していると銀行の中から犯人であるう二人が出てきた。俺はそいつらを白井に任せて銀行内に入っていく。

「風紀委員だ……怪我人はいるか！？」

中を見回してみると幸い爆発はシャッターを壊すためだけに使われたらしく従業員や客にケガをしている者はいなかつた。
俺はとりあえずの安全を確認し、従業員の一人に現場の説明を求める。

「いきなり強盗たちが入ってきて……金を出せと」

「さつき出ていった三人だな」

「いえ……」

「？」

「強盗は五人です」

「……くつそこなところでオリジナル設定いらねーんだよ……」

急いで銀行を出て残り二人を探す。

白井のほうを見てみれば一人目の強盗を地面に磔にしているところだった。

御坂たちのほうはやはり居場所が解らなくなつた男の子を探している。

「チツ、残り一人はどこに行きやがつた………！」

周囲を見回すが強盗の姿は見つけられない。と、何やら車のエンジン音が聞こえてきた。

(三人目が車に乗り込んだのか！？)

もしそうであれば佐天が顔を蹴られ御坂がぶちギレな場面なのだが、違つた。

御坂たちはまだ男の子を探している。

「…… オイオイそうこうとかよーー。」

エンジン音がしたのは御坂や白井たちとは反対の道路。その曲がり角から猛スピードで車が現れたのだ。

「二人は足を確保してたつてことか」

桜華は車の行く手を塞ぐべく道路のど真ん中に立つ。

車をどう止めようか考えていたら唐突に後ろからもエンジン音が聞こえてきた。

振り返つてみれば三人目が車に乗り込んでこちらに向かってきていた。

既に御坂は紫電を走らせ迎え撃つ気満々で立っている。

「そうだ。御坂！！」

「なによ……」

距離が少し離れているため自然と声が大きくなる。

「コイン一枚貸してくれ……」

「何に使うのよ……」

「いいから早く……」のままじゃ俺轢かれる……」

「解ったわよ……」

御坂はポケットから「コインを一枚取り出し、一枚を桜華のほうへと投げる。

それを受け取った桜華と御坂がコインを弾いたのはほぼ同時。

ピイイン

とこう甲高い音をたてて宙を舞つ一枚のコインはやがて重力に負けて落下を始める。

白井と磯にされた強盗が何やら言つてこないからではよく聞き取れない。

向かってくる車に向かい、俺と御坂は落ちてきたコインを撃ち出した。

……ゾ、「オオンツ……

閃光を撒き散らしながらフレミングの法則によつて音速の三倍の速

さで発射されたコインは轟音とともに車に直撃し強盗たちを乗せたまま軽やかに宙を舞う。

超電磁砲レールガン

御坂美琴の代名詞と言える必殺技を俺は放ち、強盗を仕留めた。宙を舞つた車はお互いが空中で衝突してそのまま地面に激突、中の強盗たちは氣を失っていた。

「……はあ」

強盗を警備員に引き渡した後、俺は盛大に溜め息をはいた。

「疲れた、いやこれといってなんもしてないけど」

「お疲れさまでした桜華さん」

初春が労いの言葉をかけてくれる。佐天はやはり顔を蹴られたらしく頬に湿布を貼つていた。

「桜華さんの能力はお姉様の超電磁砲まで使用することができますのね」

警備員との話を終えて戻ってきた白井が驚いたように呟つ。

「ちょっとアンタ！…本当にレベル1なわけ！？」

先程まで佐天と話していた御坂がものすごい剣幕でじりじり話め寄つてくる。

「白井、俺逃げるから後よろしく」

それだけ言い残して俺は御坂から逃げるべくテレポートでこの場から離脱する。

「あーーー待てこら逃げんなーーー！」

夕暮れの学園都市に御坂の叫びがこだました。

第九話 7月16日（後書き）

感想お待ちしています。

第十話 7月17日（前書き）

全然投稿出来なくて申し訳ありません……
そして短いです……

第十話 7月17日

「グラビュン虚空爆破事件？」

午前授業を終えて風紀委員第一七七支部にやつてきた桜花は白井からその事件の名を聞いた。

（あれか……確かに上条さんが幻想殺し（イマジンブレイカー）を使って皆を助けた事件だよな）

「桜花さん？」

考え方をしていた俺に白井が呼び掛ける。

「ん、ああスマン。続けてくれ」

「実際に学生に被害が出たのが昨日です。固法先輩が向かつた重子力の爆発的な加速が観測されたコンピュード同僚の風紀委員が一般人を庇つて重傷を負いましたわ」

デスクに座つて難しい顔をする白井。おそらく犯人の手掛けりが掴めていないことに焦つているのだらう。

俺は詳細を原作知識で知つてゐるが一応生の情報を得るために白井に尋ねる。

「それってどういう能力を使つてるんだ？」

「アルミを基点にして重子力^{グラビティン}の数ではなく速度を急激に増加させ、それを一気に周囲に撒き散らす。要は『アルミを爆弾に変える』能力ですの」

「……成程な」

どうやら犯人は原作と同じ人物らしい。

昨日の銀行強盗の一件で全てが原作通りに進むわけではない、といふことが解ったため、原作と同じような状況になるかは解らないが。

「ぬいぐるみの中に入刀^{スプーン}を隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきますの」

デスクに並べられた事件に使用されたアルミの残骸に手をやりながら白井が言つ。

「爆発の前に前兆があるので死亡者^{ヒト}を出でいませんが……まだ犯人の特定ができていませんの」

「書庫^{バンク}を洗えればその能力を持つてる奴が割り出せるんじゃないのか？」

事のあらましを知つてゐる俺が何故こんなことを聞いたのかと言うと、この事件を皮切りに幻想御手^{レバーラッパー}事件に繋がるのかを確認したかったからだ。

この事件が発生している時点ではほぼ確定だが、一応知つておいたほうがいいと思ったのだ。

「……妙なのはやい」ですの」

脇に落ちない、といった表情で白井が、

「『量子変速』。それも爆弾に使用できる程に強力な能力者となると、学園都市にはレベル4の釧路帷子という生徒ただ1人しかいません」

「ならやいが容疑者じゃねえのか？」

「それが……一連の事件の始まりは1週間前なのですけど、彼女は8日前から原因不明の昏睡状態に陥っていますの」

(……決まりだな)

「病院からの外出はおろか一度も意識を取り戻しておりませんし、医療機器にも記録が残っていますから、彼女に犯行は不可能ですのよ」

「書庫のデータが間違ってるってことか？」

「あるいは桜花さんのように偽装されているのかもしませんわ」

「俺の場合はイレギュラー過ぎるからな。俺以外にそんな奴がいるなんて考えられねえよ」

「ですが……」

「それより可能性としてあるのは短期間で急激に力をつけた能力者、とかだる」

「それは薄々わたくしも考えてはいたんですが、滅多にないケースですしだった」

「その滅多にないが今起きてるのかもしれないだろ？」

後頭部のところで腕を組みながら俺は言つた。

（さて、どうする……とりあえず初春と佐天がセブンスミストに行くのはまずいな。時間は……まだ間に合つた）

「白井、初春に連絡とつてくれるか？」

「え？ ええそれは構いませんが、どうするんですの？」

「理由は後で話すから今は初春に連絡だ。すぐに佐天を連れて此処にくるように言つてくれ」

「はあ、解りましたわ」

白井は携帯を取り出し白井に連絡をとる。これで初春と佐天が事件に巻き込まれることは回避できた筈だ。

（後は俺が直接セブンスミストに行つて介旅を叩くか？ あそこには御坂と上条さんも居る筈だし、御坂に協力してもらえばすぐに捕まえられそうだ）

「桜花さん」

「ん？」

「初春たち、セブンスミストに行つてからでもいいかつて言つてしますの」

「ダメだ

「ダメらじこですわ初春」

『』

「ひらに来るわつですわ

通話を終えた白井が俺に報告してきた。

これで問題はないはずだ。いくらイレギュラーが発生してもまさか風紀委員の支部で爆発はしないだろ？

とこつ」とは……

俺は座つていた椅子から立ち上がり、ドアへと向かつ。

(俺が直接介旅を叩く……！)

「桜花さん？どこに行くんですか？」

何処かへ向かう桜花を見て白井は問い合わせる。

「白井は初春たちがやつて来るのを此処で待つてゐる」

「一仕事してくる

「桜花さんは……？」

白井が何かを言つ前に、俺はドアから外へと出た。

さあ、お前が何処にいるのかは知らないが、初春がセブンスミストに向かわない以上セブンスミストに爆弾を置く事はしないだろう。見つけ出して取つ捕まえるぜ、介旅初矢。

俺は炎天下の学園都市を走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229q/>

とある学園都市で学園黙示録

2011年11月11日17時52分発行